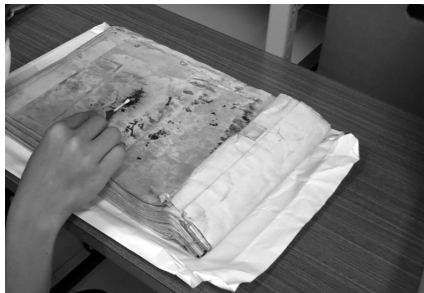


文化財の虫菌害についての調査・助言 (⑤保修)

文化財の虫菌害対策に関する要請に対して指導・助言を行った。主な相談先は、国や地方公共団体の博物館、美術館、図書館、教育委員会や社寺等の文化財保存担当あるいは文化財修復関係機関等であった。対応件数は、32の相談先から合計で36件であり、7件については虫菌害の現地調査等のより細かな解析を実施したものが含まれる。

虫菌害の内容は、文化財展示収蔵施設全体に関する事柄から、個別の作品に対する事柄まで多岐にわたり、環境は屋内のみならず屋外環境におかれた文化財についての事柄もあった。対象も多岐にわたり、鳥類、両生類、爬虫類、小型の哺乳類などの小動物、昆虫類、カビや細菌などの微生物から、地衣類、藻類、草本類といった光合成生物にも及び、広範囲の対象に対応した。また、津波被災文化財など災害に伴う水損資料の処置に関する事柄もあった。

博物館、美術館、図書館などでは、IPMに基づく管理体制への変更が進められている状況にあって、単に予算の削減のため定期的な殺虫殺菌燻蒸処置の中止となった館が、その後数年を経て虫菌害の被害が出てくるという事例が数件あった。これについては、近年の傾向として問題視していかなければならないのと同時に、正しい文化財IPMの教育普及が今後の喫緊の課題として浮き彫りとなった。



文化財展示収蔵施設（公立の公文書館）
でのカビ被害調査

保存担当学芸員研修 (⑤保修10-15-5/5)

1. 博物館・美術館等保存担当学芸員研修

日程：2015（平成27）年7月13日（月）～24日（金）

参加者数：32名

資料の「保存」は博物館や美術館といった文化財施設に課せられた大きな使命であるが、これは単に「保管」することではなく、資料の「文化財」としての価値が環境要因に起因する物理的、化学的変化によって損なわれることを防ぎ、後世に伝えることである。従って、「保存」は極めて自然科学的な行為であるが、それにも関わらず保存を担当する学芸員がそのための専門知識や技術を学ぶ機会は極めて乏しい。そのため、東京文化財研究所では、1984（昭和59）年以来毎年、資料保存を担当する学芸員などを対象とした「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」を実施し、現場で自らの手で保存環境を把握し、必要な改善を行うことの出来る人材を育成してきた。これまでの修了生は800名近くとなり、各地で資料保存の重責を担っている。平成27年度は、32回目となる本研修を2週間実施した。

⑤研究指導・研修等 Area22

7月13日（月）

岡田健「文化財保存 概論」

佐野千絵「保存環境 各論－文化財の材質・構造－」

宇田川滋正（文化庁）「保存環境 各論－文化財公開施設の設計－」

7月14日（火）

佐藤嘉則「生物被害 概論」

佐藤嘉則「生物被害 各論－カビ－」

吉田直人「保存環境 各論－温湿度－」

早川泰弘「保存環境 各論－大気汚染の影響－」

7月15日（水）

佐野千絵「保存環境 各論－空気汚染－」

吉田直人「保存環境 実習－室内汚染の測定法－」

吉田直人「保存環境 各論－光と照明－」

佐藤嘉則「生物被害 各論－虫－」

小峰幸夫（元・文化財虫菌害研究所）・佐藤嘉則「生物被害 実習－文化財害虫同定－」

7月16日（木）

IPMフォーラム『臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』受講

7月17日（金）

早川典子「劣化と保存 各論－修復材料－」

三浦定俊「保存環境 各論－防災・防犯－」

ケーススタディ テーマ打ち合わせ

7月21日（火）

「環境調査実習－ケーススタディ－」（於：埼玉県立さきたま史跡の博物館）

7月22日（水）

朽津信明「劣化と保存 各論－屋外資料－」

山本記子（国宝修理装演師連盟）「劣化と保存 各論－日本画－」

7月23日（木）

山口孝子（東京都写真美術館）「劣化と保存 各論－写真－」

中山俊介「劣化と保存 各論－近代文化財－」

坂本雅美（紙本保存修復家）「劣化と保存 各論－紙－」

ケーススタディ発表

7月24日（金）

木島隆康（東京藝術大学）「劣化と保存 各論－油彩画－」

北野信彦「劣化と保存 各論－考古・民俗資料－」

2. 保存担当学芸員フォローアップ研修－水俣条約による水銀規制と展示照明等への影響－

1984年に始められた「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」受講者はそれぞれの施設で、また、地域の中核的存在として資料保存の重責を担っている。しかし、保存に関する知識や技術は日々新しくなる。本研修は、資料保存に必要な最新の知識を持てるように行うものである。

2020年以降の水銀および水銀を使用する製品の規制を定める、いわゆる「水俣条約」によって、資料保存や修復の分野でも様々な影響が生じることが考えられるため、本研修では、同条約の内容と予想される影響を概説した。特に蛍光灯の生産縮小に伴い、代替光源として導入が必須となるLEDの現状と展示上の問題について、さらに、水銀を用いる写真資料の作成、修理への影響などについて取り上げた。

日程：2015（平成27）年7月6日（月）13:30～17:30

参加者：107名

プログラム・講師

佐野千絵「水保条約の概要」

吉田直人「LED照明の歴史と現状」

久保恭子（公益財団法人 日本美術刀剣保存協会）「LED照明による日本刀剣展示への影響」

川瀬佑介（国立西洋美術館）「国立西洋美術館におけるLED照明による展示の実際」

山口孝子（東京都写真美術館）「写真資料への影響（LEDによる展示、ダゲレオタイプ写真製作等に関して）」

東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進 (⑤共)

目 的

1995（平成7）年4月より東京藝術大学と連携してシステム保存学コースを開設し、21世紀の文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座の2講座から成る。6名の所員が連携教員として授業を開講している。

成 果

1. 開講した授業および担当教員

保存環境計画論（前期、火曜1限） 2単位 佐野千絵

修復計画論（前期、木曜1限） 2単位 北野信彦・中山俊介・早川典子・朽津信明

修復材料学特論（前期、木曜2限） 2単位 北野信彦・中山俊介・早川典子・朽津信明

保存環境学特論（後期、火曜1限） 2単位 佐野千絵・佐藤嘉則・朽津信明

文化財保存学演習（6月2日）「劣化した洋紙の保存と修復」 中山俊介

輪講（英語論文）（前期、水曜3限）

2. 論文指導 主査：早川典子、副査：佐野千絵、北野信彦

小川歩 「文化財修復に用いられる漆材料の劣化解析と硬化性・接着性の向上に関する試み」

3. 平成28年度東京藝術大学大学院美術研究科博士課程（前期）入学試験の実施 2015（平成27）年9月19・20日 合格者 1名

4. 「東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」の更新

論 文

・黄川田翔、吉田直人、佐野千絵「美術館・博物館の資料保護に向けた光曝露量の評価方法—染色布を事例に」『照明学会誌』100（2） pp.74-81 16.2

・小川歩、早川典子「テトラクロロ銅（Ⅱ）酸カリウム二水和物添加による漆効果の温湿度条件緩和の検討」『保存科学』55 pp.11-26 16.3

発 表

・小川歩、早川典子、「銅錯体触媒による高乾燥性漆材料の開発とその耐久性評価」マテリアルライフ学会大会 群馬大学 15.7.4

・小川歩、早川典子「麦漆の接着強度評価と銅触媒添加によるミャンマー産漆への応用」日本文化財科学学会大会 東京学芸大学 15.7.11-12